

第5回派遣中止について

2011年7月11日
四日市東日本大震災支援の会
代表 鬼頭浩文(四日市大学)

四日市東日本大震災支援の会の活動をご理解・ご支援いただき、たいへん感謝しております。残念ではありますが、本日午後のスタッフミーティングで、第5回の派遣を辞退する決定をさせていただきました。大きな理由は、現地ニーズの終息と、連休・夏休み初日にボランティアが殺到していることです。われわれが出かけることが、かえって現地に迷惑になるという結論に達し、派遣辞退の判断をしました。

あの日から、ちょうど4ヶ月がたちました。ニュースで被災地のことが大きく取り上げられています。避難所にいらっしゃる被災者の皆さんは、順番に仮設住宅への入居が進んでいます。ただ、「自立に向けた」という言葉は、素直に受け取ることはできません。仮設に入れば光熱費も食費も自前ということになります。クーラーを使わない方や、当たっても入居をためらうとか、いろんな不自由に関する報道があります。しかし、現地で活動をしておりますと、復興に向けて確かな前進をしていらっしゃる方が多いことは間違いのないところです。

現地の本当のことは、現地に行って、暮らしてみないとわからないと分らないとは思いますが、テレビは目立つところだけ取り上げますし、テレビカメラを向けられて身構えない人はいません。現地の本当の状況はこちらでは理解できないところがほとんどだとは思いますが、多くの方はまだ助けを求めていることは間違いのないところだとは思いますが。被災地は岩手・宮城・福島ととても広くて状況がさまざま、同じ地域でも、お宅が全壊した方、家族や親類を亡くされた方、放射能の問題で避難されている方、避難できずに不安に暮らしている周辺の皆さん、軽い被災ですんだ皆さん、仕事を失った方、などなど。思いも、生活も、仕事も、状況は本当にさまざまです。しかも、その状況は、毎日のように変化していきます。

チーム日本として、四日市から支援をしてきましたが、現地情報の入手と、実際の派遣計画との間に、どうしても募集期間というタイムラグがあります。さあ、出かけるぞ、というタイミングで活動場所が変わったり、あるいは、突然受け入れが中止となったり、行ってはみたものの活動がキャンセルになったりと、何が起るかわからないミステリーツアーのような派遣が続いてきました。これは、現地に根ざしたというより、宮城県社会福祉協議会という大きな枠組みの中で、支援の空白が無くなるよう手の足りていないところに派遣要請が来て、そこに出かけるというスタイルをとってきたからです。

さて、われわれは、4回の大型ボランティア・バスパックで、学生・教職員・一般参加者により、のべ8日にわたり、宮城県東松島市で災害ボランティアとして、個人宅のドロ出し、側溝の掃除などをしてきました。そのような活動は、宮城県においては多くのエリアで終息に向かっており、いくつかの社会福祉協議会においては、今月中に災害ボランティアセンター、あるいはサテライト部門をいくつか閉鎖、8月上旬には県外ボランティアの受け入れが終わる予定というケースが目立ち始めています。今後は東北の域内の皆さんを中心に、復興に向けて少しずつニーズを処理する体制に変わっていくものと思われまます。

まだまだ、まだまだ、課題は山積していて、われわれ技術を持たない素人集団ができることはあると思います。ただ、現地では通常の営業を始めている小売店や工場などが多くなってきました。幹線道路沿いの大型スーパーやコンビニは、普通に営業しています。仕事が大きく遅れてはいるものの、住宅や公共施設の修理なども着実に進んでいます。それらの経済活動の妨げにならず、被災地の皆さんのさまざまな思いを受け止めて寄り添っていく活動は、とても難しいと考えています。ボランティアが無償で働いたり、支援物資や食料を無料で提供したりすることは、仕事として対価を得て生活をしていらっしゃる方たちの営業妨害になることもあり得ます。支援の新しいステージの活動がどうあるべきか、われわれも現地情報を集めながら考えていきたいと思ひます。

支援の会としましては、今後も長く東北の支援を継続していきたいと考えております。今後とも、皆様方のご理解とご支援をいただきますよう、よろしくお願ひいたします。